

手に持つ器

坏の出現

弥生時代以降、古墳時代前期（4世紀）までの長きにわたり、土器としての供膳器は高坏が圧倒的に主体を占めています。この状況が一変するのは古墳時代中期（5世紀）のこと。朝鮮半島から登り窯による焼成技術が伝わり、須恵器生産が開始されます。それとともに新たな供膳器として伝わったのが坏（つき）と呼ばれる器です。

初現期の坏

出現期の須恵器坏は、高坏の脚部を取り除き、坏部だけを残した形をしています。高坏には有蓋と無蓋のものがありますが、出現期の坏は有蓋高坏の坏部と同等の形態です。しかし早々に蓋のつまみが省略され、坏蓋は無蓋高坏の坏部と同等の形になります。この坏身と坏蓋のセットを考古学では蓋坏（ふたつき）と呼ぶのですが、出現してまもなく、蓋も容器（身）としての役割を前提に製作されたことがわかります。

手に持つ器

古墳時代中期以降、土師器高坏も小型化し、銘々器としての地位を確立します。同時に、須恵器坏の出現に影響され、土師器坏も誕生します。

さて、脚部の存在から高坏は「台（地）に据える器」と考えられますが、坏はどのように使われたのでしょうか。

須恵器蓋坏は、登場時の5世紀前半こそ平底（天井）ですが、5世紀後半には丸底（天井）化し、据えるには不安定な形となります。そもそも高坏脚部の省略化は、口と食物とが遠くなることを意味します。坏は登場時より「手に持つ器」であった可能性が高いと考えて良いでしょう。古墳に樹立する人物埴輪（はにわ）に、坏を持つものが散見されるのもその根拠の一つと言えます。

蓋坏の変貌

7世紀、突如として須恵器蓋坏の天地が逆転し、蓋の天井部に擬宝珠（ぎぼうしゅ：仏教建築物に付けられるタマネギ形の飾り）形のつまみが、身の底部に高台が出現します。これは舍利（しゃり）容器や銅鏡などの仏具に影響を受けたものと推定されますが、この変貌は瞬く間に列島に広まり、銘々器として定型化していきます。

